

● 研究報告

浅野晃 『幻想詩集』 を読む

—— 伊藤千代子への^{まぼろし}の思いと救済を求めて ——

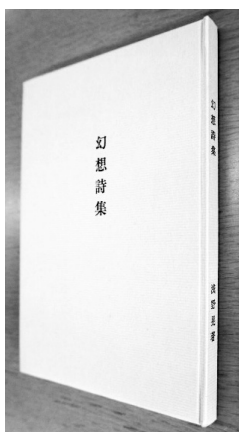
入谷 寿一

はじめに

私は昭和五七（1982）年に穂別町立穂別中学校に赴任した。穂別町は北海道胆振支庁の東端の山村で、農林業の町であった。日高支庁の平取町、日高町に接し、胆振のチベットと言われていた。昭和二〇（1945）年、戦後初の村長になった横山正明は、早くから宮澤賢治の思想に魅せられ、賢治に似せた聖観音像を岩手の仏師、佐藤瑞圭に制作させ、それを村内各地区の集

会所に飾って、住民に公開し、賢治思想の普及を図っていた。

横山村長は、当時苫小牧市勇払に疎開していた文芸評論家浅野晃のことを知り、早速村内に招いて、青年たちを対象に萬葉集や短歌創作の指導をさせた。その



▲まぼろしの詩集となった浅野晃著『幻想詩集』

中に村内山里会で文芸活動をしていた紀藤義一・成田れん子・戸沢愛らがいた。当時浅野は苦小牧の画家遠藤ミマンから宮澤賢治全集を借りて読んでいて、賢治の童話や詩の世界に惹きこまれていた。早くから賢治思想を受け継ぎ、自らも法華経信者として賢治の願ったイーハトヴづくりを村づくりに生かさんとしていた横山村長は、浅野に共感し、住民の文化向上にと、しばしば浅野を招き、自身も親しく交わった。

横山村長は村づくりには電源開発が欠かせないと、穂別のTVAとしての構想を練り、実現するべく努めていた。その支援のため浅野は、当時自民党の幹事長だった広川広禪に渡りをつけ、国庫補助をつけるようにした。

穂別での浅野の指導から歌人成田れん子が誕生した。れん子は一九五一年に歌集『笛を吹く魚』を発行。浅野は序文の中で、「穂別に天才歌人現わる」と激賞した。れん子は一九五九年、三三歳で病没。翌年、遺歌集『哀郷のうた』が発行された。序文で浅野は「仔細に見れば見るほど、限りなくうつくしい。それは燃えてゐる無数の珠玉である。」と讃えている。浅野の指導で、彼が寄寓していた国策パルプ勇払工場で「こぶし短歌会」

「火山灰詩会」が発足。また、工場長の南喜一が寄付して設立された苦小牧文化協会で「世界史講座」を続けた。一九四八年には、結成された苦小牧短歌同好会に参加、以後苦小牧短歌会として一九五〇年、東京に転居してからも変わらぬ指導を続け、歌人小池豊子・紀藤義一らを育てた。また、苦小牧の画家や文芸愛好者と交流を深め、市内の美術や文芸を網羅した「蜂の巣会」を結成、総合芸術誌「はちの巣」を発行。浅野もこの会のメンバーたちと深く関わり、前述の歌人や詩人の尾形俊雄たちを育てていた。

私は一九五七年に苦小牧に転住し、市内中学校に勤務、同好の仲間らと詩誌『こぶし』を発行しつづけた。浅野はすでに勇払を去り、東京に転住、立正大学教授として勤務。詩集『寒色』で読売文学賞を受賞、一躍詩人として注目された。この詩集は、浅野が勇払海岸の茅屋で過ごした体験から生まれたものである。私も詩人を目指す者として、浅野の詩作を読み、北国の荒々しい自然と同化し、清廉な境地に浸っている生き方に共感していた。

その後私は穂別町立穂別中学校に転任。浅野は当ても穂別町の招きに応じて度々来町して講演し、その後

は町民有志らと親しく懇親していた。私もその席に加わっていた。私は東栄蔵著『伊藤千代子の死』を読んでいた。浅野に「伊藤千代子のこと、どう思われていますか」と、あえて不躰な質問をした。浅野はしばらく私の顔を見つめていたが、「千代子にはすまないことをした」とぼつりと言って、座を外した。その後浅野とは支笏湖畔のホテルで一緒に泊まり、同好者らと酒を飲みかわし、親しく懇談した。浅野は温厚な紳士で、誰彼なく差別せずささくに歓談していた。私もその人柄に魅せられていた。

浅野は敬愛していた昭和天皇が亡くなった一年後に、八九歳の生涯を閉じた。私は、苦小牧・穂別の街づくり、文化振興の精神的支柱となった彼の死を悼み、私為主宰していた詩誌『錨地』^{びょうち}で、彼を知る地元^{じもと}の文学者・画家・研究者たちの寄稿を集めて「浅野晃追悼号」を編んだ。

さらに市民芸誌『苦小牧市民芸』でも、私が中心になって、追悼特集をした。浅野の死後、数千冊の蔵書、彼の著書、書簡等の資料が穂別町に寄付され、町内の富内生活館内に、浅野晃資料室が設けられた。その中には、伊藤千代子の書き込みのあるマルク

ス著浅野晃訳『哲学の貧困』があった。私はボランティアとして、冬休みにその資料の整理に当たった。書棚に、印刷されながらも頒布されなかった詩集『幻想詩集』が十数冊並べられていた。私は一冊貰い受けて読んだ。読んでショックを受けた。以後、私の浅野晃への見方が大きく変わった。

『幻想詩集』を読んで、私は、浅野の文芸活動やその生き方を批判的にみるようになった。浅野は、戦中時に、日本の古典に帰り、それを受継げと、評論家として、森鷗外や夏目漱石までも、西洋かぶれと攻撃した。戦後も戦前の国体思想を持ち続け、大東塾という右翼団体と親しくし、出版顧問になっている。彼の葬儀に参加した苦小牧の詩人尾形俊雄は、右翼の人たちが多数来て違和感を持ったと語っていた。世界的教養の持主の浅野がなぜ無警戒に右翼と接近したか、そこしか文学者としての居場所がなかったのか。今も私には理解できかねている。

私に対して、かつて穂別町の浅野晃資料室で共にその整理に当たった仲間や、地元の浅野ファンからは、裏切り者として非難された。しかし、苦小牧中央図書館で、獄中からの伊藤千代子最後の手紙が公開され、

文芸関係者を問わず、多くの人が見に来て、貧しい労働者・農民を初めとする人民解放のために節を曲げず、闘い通して若き生涯を閉じた千代子への思いに心を揺さぶられ、彼女等を逮捕・獄死させた治安維持法なる悪法への関心を高めた。そのためか私への逆非難も自然と消えていった。

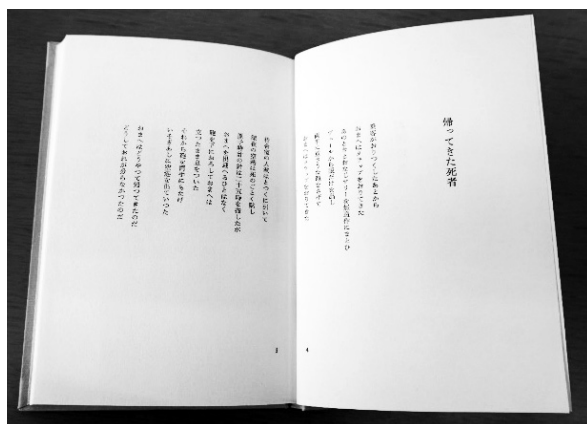
伊藤千代子を愛し、彼女の遺志を継がんとする畠山忠弘さん等苦小牧地方の有志らによって、「伊藤千代子最後の手紙公開記念の集い実行委員会」（略称「千代子の集い実行委」）が設立され、私も参加し、数年おきに記念集会を開催するなど活動を続けている。当時、苦小牧短歌クラブ会長の私も、研修会で札幌在住の歌人山本司さんを招き、「土屋文明と伊藤千代子」について講演をしてもらい、関心を深めた。

いま「伊藤千代子の生涯」を題材にした映画化が、藤田廣登著『増補版・時代の証言者 伊藤千代子』原作・独立プロの桂壮三郎監督によって進められている。その資金づくりの実行委員会が全国各地で作られ、苦小牧でも、「伊藤千代子の生涯」上映苦小牧実行委員会が設立され、九一歳の私が実行委員長に推された。病气や老化と闘いながら、老兵として、伊藤千代子の遺志

を継がんと努めている。

『幻想詩集』とは——所感

『幻想詩集』は鈴木敏幸編集の『浅野晃全詩集』に何故か入っていない。全詩集が編まれたのは昭和六〇年であり、『幻想詩集』が刊行されたのは昭和四九年であ



▲『幻想詩集』——「帰ってきた死者」の冒頭部分

る。作者自身の希望であつたのか。せつかく刊行されたのに何故か広く配布されることはなかつた。いずれにしても意図的に外されたのは間違いない。

この詩集は、六一行（帰郷）から二六八行（他界での会話）という比較的長い六編の作品が収められている。そのうち三編は、作者浅野晃の最初の妻であった伊藤千代子と、彼女と親しかった浅野の妹喜美枝への思いを幻想風に綴ったものである。千代子は二四歳、喜美枝は二二歳の若さで亡くなっている。

千代子は浅野が非合法下の共産黨員時代に、思想活動を通じて結ばれ、困難な活動を共にした同志でもあった。

一九二八（昭和三）年三月一五日共産黨員全国一斉検挙の大弾圧が行われたときに、二人は相次いで逮捕された。嚴重な取調べと執拗な転向への圧迫にも屈しなかった千代子であったが、浅野が水野成夫等と共に日本共産党を解党するよう上申したことを知らされて、強い衝撃を受けた。劣悪な監房に拘禁されたことによる精神病を患い、収容された東京府立松沢病院で肺炎のため亡くなった。

強制的に引き離された投獄中であって、自分が解党派に加わった考え、事情について妻に全く話すことができぬまま、自分の党に対する考えの転換、行動に依って妻に強い衝撃を与え、遂には死に追いやったことへ

の浅野の悔いと罪の意識は計り知れないものがあつたであろう。

詩集冒頭の作品は「帰ってきた死者」六連七〇行である。夢の中の風景で、「おまへは」サリーをまといつて、深夜の空港に降りてきた。「原子時計の針は二十五時を指したが」とあるので、非現実的風景であることが分かる。迎えに行った「おれ」に、「おまへ」は「むかしのままの澄んだひとみでおれの方を見た」が、「どうしておれが分からなかったのだ」と嘆く。「おれ」は「おまへ」を追って、沙漠の市（まち）——「いくたびおれたちは追跡されて／路次から路次へと逃げまはつた」——非合法時代苦勞を共にした街で、「おまへ」の影を追つたが、「見あたらなかつた」「おまへはどこにある」「二度ともう会へないのか」と、せっかく「おまへ」が帰ってきたのに会えない焦燥感を滲ませている。そして、「おまへにおれが／どうして分からなかつたのだ」と、夢の中でも、夫である自分を認めようとしなない「おまへ」との深い心の断絶を嘆いている。

「いつてくれおまへとは二度ともう／会へないのか——」この最終連の嘆きがこの詩全体の主題となつて、読者に重層的に迫ってくる。

「おまへ」とは、浅野の最初の妻であり、困難な非法時代苦楽を共にした同志であった伊藤千代子である。

この千代子と共に過ごした非法時代がどうして「沙漠の時」であり、共に暮らした街が「沙漠の市（まち）」なのか。ここに転向後、反共産主義を貫いた浅野の考えがみえる。千代子を巻き込んで参加した共産党運動は誤りであり、日本古来のよき国民性を破壊するものとして「沙漠」の表現がある。日本浪漫派の研究に取り組んでいる中村一仁は、この詩の一部を引用して次のように述べている。

〈……それとも不毛だつたあの無謬理論に／あたら青春を賭けたこの悔いが／おれたちの沙漠の時をおまへに抹殺させたのか……〉

「……浅野には、千代子に自分が共産主義思想を捨てた真意を説明できないまま、千代子と死に別れてしまったといふ絶望感や断腸の思ひがあつたはずである。その思ひが『帰ってきた死者』から強く感じられる。また、『無謬理論』について言及した部分を読めば、その『無謬理論』こそ二人の人生を狂わせたのだといふ浅野の後悔の念が改めて強く伝はつてくる……」（伊藤千代子書簡の公開への感想）文藝同人誌『味爽』第九号）

無謬理論とは、科学的社会主義に立つマルクス主義及びその理論に基づく実践を進める共産主義運動理論をさす。この理論通りに実践をすれば、誤りなく今まで搾取にあえいでいた労働者、農民が解放され、幸せな社会が到来すると信じられ、当局の苛烈な迫害の中、困難な運動に参加していたのである。

詩集二編目が「他界においての対話」で、死者たちが居る異界での姉と妹の対話形式で、二二五行の長詩になっている。姉が浅野の妻千代子で、妹が浅野の妹の喜美枝であることは、終わりから四連目の「妹」の言葉にある「姉上の最後のお便り」の文面「……：なつかしい皆さま心からの感謝と祈りをお受けとり下さいまし／美しく晴れた夏の朝 又。」は、実際に千代子が獄中から浅野の母すて宛に送った手紙なのである。この手紙を最後に約二カ月後、千代子は拘禁による精神病で入院していた松沢病院で、急性肺炎で亡くなるのである。満二四歳であった。千代子を姉のように慕っていた妹喜美枝も、五年後に面癪を患って二二歳の若さで亡くなっていたことをこの詩の中で触れている。

この詩の最初は妹の言葉から始まっている。「わたしたちは」天にあって日本列島を見下ろしている。「翼を

ひろげて翔つてゆく鵬」のような国土の形が崩れ「根のないもの見かけ倒しの……かなしい戯画」となつていく。「あまりに軽いものが」わが国土を覆い、混乱の様相を呈していることを憂える。

これを受けた姉の話が四連一二〇行に及んでいる。「未来への誘いが／荒々しい声をひびかせ」、その声は「朝から夜中まで……荒れるにやいだけ荒れ狂い」、それは「自由を奪はれた不毛の地帯から／砂嵐のようにおしよせ……父祖の渚を……騒がせてゐる」と、共産主義思想が日本に広がり、混乱を起こしていることを告発している。この声に動かされた集団が「算をみだして横たはり……鬼火のごとく燃えさまようた」とその末路を揶揄し、「われらをとりまいてゐるのは／混乱した無秩序と扇動者の醜さです」と断じている。そして、「かしこに／わたくしたちの聖なる原始の森は／蒼々とひろがつてゐます／森々としづまつてゐます……老杉のあひまに満天の星がきらめき／莊嚴な神気が乾坤にみなぎる／……これがわれらの生誕と成育と転変の秘儀なのです」と、日本古来の神道的思想を説いている。姉は千代子に擬せられていることは前述の通りである。しかし、共産主義に心酔し、日本共産党に献身し、投

獄され、酷い拷問にあつても節を曲げなかつた千代子が、このような反共産主義の考えを採る訳がない。これは共産党解党宣言をし、やがて共産主義からも離別して日本古来の伝統、国体に還り、天皇制を護持する超保守回帰をした浅野の考えそのものである。ここは「姉」ではなく、浅野晃である「兄」とすべきである。

これについて中村一仁は「……なぜ浅野はそのやうな『姉』を描いたのか。それは自分が千代子に指導したマルクス主義のせるで千代子を死なせてしまつたといふ強い自責の念によるものである……戦前からソ連共産党のあり方を批判し続け、……その晩年にはソ連による大韓国防空機撃墜事件を告発した浅野にしてみれば、千代子はマルクス主義といふ残酷で非人間的な観念組織の犠牲者以外の何者でもなかつたであらう。浅野は『姉』を事実のままに、共産主義者にして短い生涯を終へた存在とは描けなかつたに違いない」と、転向後一貫して反共産主義を唱えた浅野の立場に拠つて説いている。

そしてこの『幻想詩集』について「……いたづらに千代子の非転向を絶対視する余り、『事実と違ふのではないか』『共産主義者として死んだ千代子を冒瀆するもの

だ』などと言って、浅野に謝罪や反省を求めめるやうな読み方するのは実に幼稚極まりなく、全く感心できない。そのやうな読み方では、この詩集の持つ奥深さや、この詩集にこめられた浅野の思ひや祈りはりかいされないであらう」と激しく論じている。

しかし、非合法下の共産黨員として最後まで生き通した千代子をモデルにして、本人の生き方に反する反共的考えを、あたかも本人の考えとして語らすのは許されることではない。いかに文学作品といえど、二人の関係を知る読者の共感を得るのは難しいであろう。

また、マルクス主義を奉じた実践者達をすべて「残酷で非人間的な観念組織」と括ってよいのか、大いに疑問を持つものである。それこそ学問的な歴史検証が必要であらう。

姉と妹の次の対話で、姉は「あのひとは私らの臥床ふしどに何を置いていったとおもふの」と問いかけ、「花」ではなく「剣」が贈られたと言う。「純潔で 明澄で 永遠に北斗を指す／単純であることの故に不動な剣」である。それを「あのひとの愛がさうさせたのです」夫の愛の証として喜んで語っている。妹はその剣を、信

念に生きた姉の戦いの象徴として捉え、ジャンヌダルクのように「あなたも囚はれのなかで 戦ひ死なれた」と称えている。文字どおり解釈すれば、「永遠に北斗をさす／単純であることの故に不動な剣」とは、永遠不動な真理をさし、姉千代子にとっては、無産階級解放を説く共産主義思想になろう。それに対し「あのひと」

—— 兎 —— の剣は、天皇制を前提とした日本古来の国体を護持するための思想であらう。ここに両者の明らかな断絶がある。

その後妹は「兄はよそながらあなたを見たのです」と告げると、「知らなかった いえ知つておました／わたくしはあのひとの妻です／あのひとは侵略者の手先となつて働くのを拒んだのです」きっぱりと「あのひと」

—— 兎 —— を信頼し擁護している。この「侵略者」の意味は、浅野が転向した後、一貫して持ちつづけた日本古来の天皇制を中心とした国体を侵すもの、共産主義者を指している。ここも姉——千代子——の信念に全く反する考えが、あたかも本人自身であるかのように語られている。

事実は、浅野が一日だけ保釈されて母すと共に当時松沢病院に収容入院されていた千代子に会いに行つ

たとき、「千代、わかるか僕だよ」と呼びかけたが、子どもがいよいよやるように首を振って去ってしまったのである。獄中で党に反旗を翻した夫を認めようとはしなかったのである。

浅野はなぜ千代子の信念に反することを本人自身に語らしめたのか。自分の共產主義からの離別と、天皇制護持への思想転換を、信頼と愛によって結ばれた最初の妻千代子にどうしても理解してほしかったからである。自分の転向によって千代子に強い衝撃を与え、死に至らしめた負い目を感じれば感じるほど、千代子には分かつてほしかったという願いを持ったのである。

最終連は姉の言葉「銀杏の葉が魚のやうに散つてゆく／私らは愛した 責務と永訣の時を——」という詩集『天と海』の一節で締めくくっている。千代子は自分の責務として日本共産党に殉じ、浅野はその共産党から離脱して、自分の責務として皇国史観に基づく国体思想を説いた。あまりに対照的な二人の生き方に対して、「私ら」と同志的結合を示す言葉で括ることはどうであろうか。違和感を覚えるのをどうしても否定できな

詩集最後は「帰郷」六一行の作品である。「……君はおつ母さんをおもひ／あのひとをおもひ 妹をおもひ／生から死をおもひ 死から生をおもふ」この「君」は二四歳で獄中死した妻千代子であり、「妹」は二二歳で面癪を患って亡くなった浅野の妹喜美枝である。浅野は突然の別れとなった愛する妻や親しい妹とのことが、癒しがたい古傷となって残り、できれば再会し、語り合うことをどんなにか願っていたのである。ここで「案ずるな 観自在の眼が／すべてを見まもり見とどける／……観自在の眼はどのひとつの刹那をも／見すてることがない」と、観自在菩薩（法華経普門品）によって観世音——観音——菩薩で知られる）を登場させて、「君」の救済を図っている。「時はすべて観自在の時なのだ……この真実の証し手に見まもられ見とどけてあること／それこそがわれらの歎ばしい救いなのだ」観自在菩薩の無限の慈愛による自己救済を享受している。生涯持ちつづけた千代子に対する心の重石、そこからの救済を観自在菩薩に見出したのである。

この作品は、前出の千代子の生前最後の手紙で終っているが、この文面から、彼女もまた観自在菩薩の慈

愛の光に包まれたことを実感したのでなかるうか。そう理解することで、浅野自身の救済を図ったのであろう。

しかし、浅野は転向以後の皇国史観に基づく国粹主義の立場をつらぬき、右翼団体大東塾出版顧問、系列の新国学協会同人にもなっている。そして、共産主義とその党のために死を賭して貫いた千代子の固い思想までも、自分の超保守思想の下に脚色している。詩は人間の魂の最も純粹な叫びである。思想詩人、鎮魂の詩人と評される浅野であるならば、何よりも千代子自身の思想、生き方を尊重すべきではなかったか。

『幻想詩集』は、浅野が長年心に痼しづりとなつて残り、書かざるを得なかったものである。自分の思想転向のために、最愛の妻であり、信頼せる同志であった女むすめを狂わせ、死に向かわせた負い目は生涯忘れることはできなかったであろう。彼女に直接会つて当時の事情を話し、理解を乞いたく思つても、もはや界を異にしてかええられない。せめて夢という幻想の中で、現世への帰郷をうながし、再会して語り合い、理解を乞うて謝したかったのであろう。

この詩集を全詩集に編むときに、敢えて外した理由

が理解できる。世界的教養と優れた知性を有する浅野は、この詩集を全詩集に入れると、どんなにか鋭い批判・非難に曝されることは充分推察できたであろう。それは生涯心に秘めて思いつづけていた千代子までも苦しめることを忍びなかったのではないか。

このように愛で結ばれた二人は、検挙され、引き離され、語り合う場や時間を持ちえぬまま、獄中での浅野の転向がそのまま二人の断絶となり、生の別れとなつたここに暗黒の時代の悲劇がある。妻は信念を貫いて理想に生き天折した。夫は日本の伝統と現実に即して生きようとし、今までと正反対の路線を歩み長寿を保つた。お互い愛し合いながら、自由なき獄中での生活の中で生き方を変えてしまったのだ。

しかし、浅野は詩人であり、情の人であった。共産主義を貫いた最初の妻を生涯忘れることはなかった。再婚したに拘らず、前妻の手紙と、獄中で千代子の死を知らされ、涙ながらに書いた「千代の死」の原稿を宝物のように持ち続けていた。敗戦後公職追放となり、不遇の生活を送りながら詩人として復活した縁の地、苦小牧市の図書館に寄贈して永久の保存を願つたので

ある。

愛しながら、投獄により引き裂かれた二人、今、彼の世でどのような再会をしているであろうか。いやいやして逃げる千代を追って、「千代、千代、僕だよ」と今も晃は追いかけているのだろうか。

(いりたに　じゅいち・詩誌『びょうち錨地』代表〈苦小牧市〉)

【参考】

東栄威著『伊藤千代子の死』

『立正大学国語国文第12号（浅野晃教授退職記念号）』

中村一仁「伊藤千代子書簡公開への感想」（『まいさう昧爽』第九号）



儀間比呂志・版画